

伊福部先生へのオマージュ

本日はお寒い中、お忙しい中を、私共の演奏会にお越しくださり、ありがとうございました。

私共は、普段はオーケストラ・ニッポニカという団体で、埋もれた作品に光を当てる——主に邦人作品の蘇演や発掘初演を柱とした活動に力を注いでおります。そもそもこうした活動に関わるようになったのは、それぞれ伊福部作品との出会いがありました。伊福部作品に接し、日本人の作品にもこんな作品があるのだという感動が原点となって、もっと他の作品についても、他の作曲家についても、知りたい、聴いてみたい、と思うようになりました。その後、いろいろな作品、作曲家に触れることが出来ました。が、いつも戻るところは、「タブカーラ」であり「日本狂詩曲」なのです。

伊福部作品の素晴らしさについては多くの方が言及されており、ここで改めてご紹介する間でもありませんが、お人柄の素晴らしさも又、多くの方が語るどころです。私共はほんのその一端しか窺い知ることは出来ませんでした。それでも圧倒されるほどの碩学と温かいお人柄を感じることができました。そしてなによりダンディないでたちに、ひたすら敬愛の念を抱いておりました。

芥川也寸志先生や石井眞木先生が鬼籍に入られても、まだ伊福部先生がいらっしゃるから大丈夫、何となくそんな風に感じておりました。その伊福部先生を失う、といういつかは来るに違いない日の事を想像しないわけではありませんでしたが、先生はずっとこのまま沢山のの人に温かい眼差しを注ぎながら、いつまでも居てくださるような、そんなつもりで勝手に安心しておりました。が、やはり別れの日はやって来たのです。なんともいえない大きな穴が空いたような喪失感が襲ってきました。どうしよう…これからどうしよう…

しかし、伊福部先生は作品とお人柄を通して、多くの事を遺して下さいました。伊福部先生に照らしていただいた邦人作品の「森」があるのです。その森の歩き方は、伊福部先生を師と仰いだ芥川先生に教えていただきました。私達はこれからもそれがどんな茨の道でもニッポニカの活動を続けていこうと思うのです。そんな力を下さった伊福部先生への感謝を込めて、一周忌を過ぎた今日、伊福部先生の室内楽の会をしようと思ひ立ちました。

プログラムを組むにあたり、当初から東京音楽大学で最後まで伊福部先生の傍に居られた甲田先生に、伊福部先生の思い出を伺いたいと考えていましたが、それにしてもピアノ組曲とヴァイオリン・ソナタでは少々短いということになり、何を一緒に演奏したらよいか、と考えました。あれこれ迷った末、伊福部先生に心酔してお若い頃は、着る物も食べる物も果ては歩き方まで真似をしていたという芥川先生の小品をと思ひ立ちました。未出版の作品でしたので、夫人の眞澄さんにご相談したところ「若い頃の作品は、どうかしら…」ということでしたが、無理をお願い致しました。これからは誰かが良いなと思って弾き、聴いた人が良いなと思ひ、又どなたかが弾いて、聴いた方が良いなと思ひ、という事が重なれば、天国の芥川先生も「あれは若い頃の作品でちょっとは恥ずかしいが、まあなかなか良かったな」と思っ下さるのではないのでしょうか。

ここまであれこれ申し述べました中でも、色々な方のご助力を得て、今日のこの会が成り立っていることにお気付きの事と存じます。力に余る企画を実現するにあたり、本当に多くの方のお力添えを頂きましたことを、心より御礼申し上げます。

甲田先生のお話、伊福部先生や芥川先生の素晴らしい作品をきっかけに、皆様もそれぞれ伊福部ワールドに心を馳せていただければ幸いに存じます。

〈加藤のぞみ〉

演奏者プロフィール

河野 航・ピアノ

5歳よりピアノを始めた(らしい)。飽きっぽい性格が災いし、引越しや進学のためにピアノの勉強が中断され、おまけに中学校では吹奏楽部でチューバ、大学ではオーケストラに入ってヴィオラに浮気をする始末。ただし、チューバやヴィオラを勉強したおかげで、ピアノを弾くのにあたっても左手や中声を聴けるようになったという点もあるので、悪かったことばかりではないと都合よく解釈している。新交響楽団にヴィオラで入団した直後の演奏会で、伊福部先生の『シンフォニア・タブカーラ』に出会い、氏の作品の魅力を受ける。また一方で、30歳を機に、現在所属しているオーケストラ・ニッポニカでモーツァルトのピアノ協奏曲のソリストとして出会った現在の師匠に弟子入りを志願し、ピアノの勉強を再開したところ。ピアノを鈴木和代、坪井圭子、近藤信子、柴沼尚子、大島正泰、福本俊之、三輪郁の各氏に師事。

加藤 のぞみ・ヴァイオリン

3歳よりチェロに転向した従兄弟の代わりにヴァイオリンを始める。師の教えに従い「言葉を覚えるように」ヴァイオリンを「身につける」。但し、「読み書き」を全く学ばなかったため、未だに楽譜が読めない。初めての邦人作品との出会いは、10歳のときの宮城道雄『春の海』。尺八の様な音を出すのだから、音の最初からヴィブラートをかけない、と教えられ、初めてノンヴィブラートの美しさを知る。新交響楽団に入団して『伊福部個展』で、ブラームスやマーラーとは全く違う交響楽の世界が在る事に衝撃を受ける。又、室内楽の仲間に恵まれ、沢山の機会を楽しんできた。ヴァイオリンを広瀬八朗、藤家桜子の各氏に、室内楽を原田幸一郎氏に師事。今回の演奏に当たり、伊福部先生のヴァイオリン・ソナタを献呈されている小林武史先生に、無理矢理数回に亘るレッスンをお願いし、沢山の事を教えていただいた。



伊福部昭先生を讃えて

2007年2月11日(日祝)

15:00 開演

カルラホール(東京・世田谷)にて

芥川 也寸志：譚詩曲 (1951)

Yasushi AKUTAGAWA : Ballata per Violino e Pianoforte

伊福部 昭：ピアノ組曲 (1933)

Akira IFUKUBE : Piano Suite

1. 盆踊

1. BON-ODORI, Nocturnal dance of the BON-Festival

2. 七夕

2. TANABATA, Fête of Vega

3. 演伶

3. NAGASHI, Profane minstrel

4. 佞武多

4. NEBUTA, Festal ballad

… 休憩 …

Intermission

「伊福部先生の思い出を語る」

" Lecture about the memory of Professor IFUKUBE "

伊福部 昭：ヴァイオリンソナタ (1985)

Akira IFUKUBE : Sonata for Violin and Piano

第1楽章 アレグロ

1st movement, Allegro - Andante quasi cadenza - Tempo primo

第2楽章《カンティレーナ》アンダンテ

2nd movement (CANTILENA), Andante

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

3rd movement, Allegro vivace

ピアノ・河野 航

Piano・Wataru KONO

ヴァイオリン・加藤 のぞみ

Violin・Nozomi KATO

お話・甲田 潤 永瀬 博彦 村岡 貞彦

(東京音楽大学・伊福部先生門下生の方々)

Lecturer・Jun KOUDA, Hirohiko NAGASE, Sadahiko MURAOKA
(Tokyo College of Music, Disciples of Prof. IFUKUBE)**芥川 也寸志：譚詩曲**

作者は、この曲を "Ballata per Violino e Pianoforte" と題している。バラータとは、14世紀のイタリアにおける詩や音楽の形式の一つであり、2つのリプレーサ(伊: ripresa. 反復句)の間にスタンツァ(伊: stanza. 詩節)が挟まれる形式となる。また、スタンツァは2つのピエーデ(伊: piede. 詩脚)とヴォルタ(伊: volta. 反復節)に細かく分かれる(同時代のフランスにおける同じく詩や音楽の形式であるバラード(仏: ballade)や、3部形式の作品であるバラデー(独: Ballade)、19世紀以降の叙情的な曲を示すバラード(英: ballad)とは関係がない)。

曲は、冒頭アダージオの4小節の短い序奏(これは、第2ピエーデの予兆となっている。)に始まり、ピアノのリズミカルなオスティナートによるリプレーサがすぐにアレグロで始まる。徐々に盛り上がりを見せ、ヴァイオリンのオクターブで最初のリプレーサの最高潮を見せると突如としてスタンツァに入り、ヴァイオリンとピアノで交互に詩的なメロディーを奏でる。ピアノによる急ブレーキがかかると、第2ピエーデがアダージオで始まり、ピアノの琴のような合いの手を挟みながら消えていく。再度第1ピエーデが反復(ヴォルタ)され、その盛り上がりそのままコーダとしての位置づけであるリプレーサが回帰される。勢いが弱まることなく曲は終結する。

リプレーサは和声的短音階の増2度の進行やナポリ2度を使用するなど、西洋音楽を多く取り入れているが、スタンツァは、陰音階に基づくメロディーや、同氏の「交響三章」を想起させる伴奏形、またピアノに琴のような音を求めるなど、とても日本的な音楽を取り入れていることが成功している。26歳の時の作品であるが、挑戦的な意欲を感じる曲である。

◆ 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏所要時間：約5分

◆ 使用楽譜：自筆譜(近代音楽館所蔵)

伊福部 昭：ピアノ組曲

1933年に書かれたこの曲は、ドビュッシーの友人であるスペインのピアニストのジョージ・コーブランドのために書かれた曲であったが、作品を送付した直後からスペインでの内戦が勃発し、コーブランドによる初演がなされたか判然としない。その後、1936年にこの曲の第1曲目がチェレブニンにより演奏され、全曲としては1938年のヴェニス国際現代音楽祭で演奏されているが、おそらくこれが初演であると考えられる。

この曲は、1991年のサントリー音楽財団による伊福部個展演奏会の際に、3管編成の管弦楽版に編曲され、その後1998年には弦楽合奏版にも編曲されている(管弦楽版及び弦楽合奏版は、「日本組曲」と改題されている)。

曲は4つの小曲からなる。それぞれが日本の夏の風物詩を描いたものとなっている。

1. 盆踊(ぼんおどり)

祭り太鼓のリズムに乗って篠笛が旋律を奏でる盆踊りの音楽をイメージした勇壮な小曲。

2. 七夕(たなばた)

「なべなべそこぬけ」の童謡を髣髴させる旋律が静かに夜空の向こうから聞こえてくるような美しい曲。和声学上の禁則である平行五度をあえて使用することで、旋律が耳に残る。

3. 演伶(ながし)

流し芸人による「寄ってらっしゃい見てらっしゃい」という客寄せの声の後、しみりとした嘆くような節が胸に染み入る。中間部のひとときの盛り上がりは殺陣を想起させる。

4. 佞武多(ねぶた)

青森のねぶた祭りをイメージした行進曲。和声の第2転回形によるオスティナートがポレロのリズムのように執拗に続く中で、笛をイメージした旋律が自由に展開され、徐々に盛り上がりを見せる。

◆ 楽器編成：ピアノ独奏、演奏所要時間：約20分

◆ 使用楽譜：全音楽譜出版社 版

伊福部 昭：ヴァイオリンソナタ

1985年に完成したこの曲は、1978年に作曲されて翌年に旧チェコスロヴァキアで初演されたヴァイオリン協奏曲第2番に引き続き作曲を約束されたものである。もともと「ソナタという形式を壊す」ことを作風の特徴の一つとしてきた作者にとって、相当な産みの苦しみを伴ったものと思われる。「ソナタの形式を壊しながらも、ソナタを一生に一度は書いてみたいと思う」という氏の言葉からも、その苦しみは想像に難くない。そもそも、作曲というのは自らのインスピレーションを一定の楽器編成という枠組みにはめ込むと考えると、楽器編成というのが制約になってしまう。あくまでも、楽器編成は、自らのインスピレーションを実現するための必要十分な条件であるべきである。その意味からも、作者のインスピレーションとこの楽器編成がぴったりと一致したこの曲が生まれたことは、日本の音楽家、音楽愛好家にとって、非常に幸運な事件であったと考えないわけにはいかない。

ヴァイオリニストの小林武史氏に献呈されている。曲は3楽章から成る。

第1楽章 アレグロ

変拍子の粗野な第一主題と、5拍子の叙情的な第二主題を中心に展開する変形されたソナタ形式。主題のヴァイオリンとピアノとの対話や中間部のカデンツァにおける朗々たる響きが心の琴線に響く。

第2楽章《カンティレーナ》アンダンテ

カンティレーナとは子守唄の意味。作者はこのピアノにおいて「ヴィブラフォンのような響き」を欲していたという。夜更けに焚き火の傍らで、老女が寝てしまった子供を胸に抱きながら謡い語っている様子が思い描かれる。

第3楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

16分音符の休みない律動が印象的である。中間の叙情的な部分を挟み、曲は最高潮に達すると同時に終結を迎える。

◆ 楽器編成：ヴァイオリン+ピアノ、演奏所要時間：約25分

◆ 使用楽譜：音楽之友社 版

〈河野 航〉